遡る時

Blackfruits

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遡る時

【Ｎコード】
Ｎ３９７５Ｌ

【作者名】
Ｂｌａｃｋｆｒｕｉｔｓ

【あらすじ】
自殺を図った僕は、死から生きていた時の記憶を遡る。それは過去の出来事であるのか、現実の出来事であるのか……全てが混沌として分からないのだった。

ある日僕は、死んだ。
迫りくるような、肌にぞわりとくる風を受けながら。
大空も下界も見渡せるようなビルの屋上から、僕は飛び降りた。
飛び降りる前の銀色の手すりの冷たさを今も覚えている。
大空のあまりにも無情な大きさを、しっかりと目に焼き付けた。
屋上まで来るのに、誰も引きとめる人がいないのもよく自覚していた。
たどたどしくて覇気の無い足取りはまるで鉛でも付いているみたいだった。
屋上から飛び降りる二時間くらい前には、仕事の同僚と会ったんだ。
「なぁ、書類知らないか？」
その書類なら僕は昨日既に机の上に置いておいた。
その時はどうせこれが最期の仕事だと、印象深かったから。
仕事に取り掛かりながら、僕が死んだら誰かが泣いてくれるのだろうかと考えていた。
泣くような人がいたら死にはしないということに気づいた。
仕事にかかる前の日は、部長に叱られた。
小さなミスではあったけど、仕方の無いことだった。
無能なら生まれてこなきゃよかったのにって思ってしまった。
でも、出勤前の朝ごはんはすごくおいしかったんだ。
僕が嬉しかったことは、多分それくらいだった。

朝ごはんは目玉焼きにご飯、一見普通なようで実はインスタントじゃないご飯は久しぶりだったんだ。
だから、とりわけおいしく感じた。
出勤して仕事をしたら、ミスしてまた部長に叱られた。

どうして自分はこんなにだめなんだろう、無能なら生まれてこなきゃよかったのに。
それから次の日になって、僕は残業だ。
明日のための書類を今日中に終わらせる。
だって、明日僕はもういないから。
僕が死んだら誰が悲しむだろう。
できれば、一人でもいい。悲しんでくれる人がいてくれたらいいのに。
仕事を終えた僕は、こっそり他人の机に書類を置いた。
次の日になって、同僚は僕に訪ねた。
「なぁ、書類知らないか？」
知らないよ。僕が知るわけない。
そう心の中で答えながら、僕は同僚と別れた。
屋上の風は気持ちがよかった。
なんでか、納得がいかなくなるくらい気持ちがよかった。
飛び降りたら、多分もっと気持ちいい。
人間が大空を飛べたら、楽しいだろうな。
それでも、飛び降りる瞬間には心がひやりとする。
もう、終わりなのだと感じる。
僕の体を圧迫するような風を感じながら、僕は落ちる。
僕は、死んだ。

僕は、死んだ。
冷え冷えとする風を受けながら、地面に向かう。
大きな大きなビルの横を掠めて――

僕は、死んだ、なら。
どうして、ここにいるんだ？

教えてくれ。

これは、いつだ――？

（後書き）

時系列が行ったり来たりするホラー系を書いてみたくて書きました。
読んでくださった方々に感謝をこめて。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3975l/

遡る時

2010年10月10日06時32分発行